Development of analysis and improvement procedure of class that uses photograph that teacher takes Part.1

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19393

実践者自身が撮影する写真を用いた、授業の分析・改善手法の開発①
Development of analysis and improvement procedure of class that uses photograph that teacher takes　Part.1

○加藤　隆弘*、　中川　一史**、　寺嶋　浩介***、下田　純也****
Takahiro KATO*, Hitoshi NAKAGAWA **, Kousuke TERASHIMA***, Junya SHIMODA****
金沢大学*、　放送大学**、　長崎大学***、カシオ計算機株式会社****
KANAZAWA University*, The Open University of Japan**, NAGASAKI University***,
CASIO Computer Co., Ltd.****

要約：本研究では、実践者自らが意図的に撮影する授業スナップ写真を活用することで、その時々の学習場面のみとりや手だてに対する反応、学習を通してめざす姿の発現やギャップのとらえを見える形であとに残し、これを分析することを通して、自ら継続的に授業改善に取り組むことができることを明らかにする。
キーワード：授業改善、授業分析、自己ポートフォリオ、デジタルカメラ活用

1.　問題の所在

多様化する学力観や学習指導要領の改訂への対応、ここ数年で急速に進む教員の世代交代への対応などにからみ、学校現場では各教員の授業実践力の向上、及びリファインが急務となっている。

これまでは、各機関・研究会等が主催する講習会やワークショップへの参加の他、各学校においても研究授業とその事前・事後の検討会など、具体的に意見を交わし、検討を進める機会を設けるなどして、状況変化への対応をはかってきた。依然として、これらの取組は各学校における人材育成、授業力養成の中核的役割を果たしているが、折からの多忙化、授業時間増などのあおりを受け、これ以上の機会確保が難しい状況となっている。

そこで重要となるのが、個々の教員が、日々の授業実践の中で自ら行う分析改善の取組である。より多くの他者から多角的に分析・改善の提案が得られる校内研究授業の場には及ばずとも、自らの中に「論理的・科学的他者」の視点を導入し、日々の実践の中で持続的に授業研究を進め、各々の授業力向上につなげる手法の開発が必要であると考えた。

本研究では、教師が撮影するスチル画像による「学び」場面の視覚化と教師の力量に関する研究（加藤 1999）を踏まえ、教師自らが実践研究と改善を進める方策について検討を行う。

2.　研究の目的

本研究の最終的な目的は「授業実践者が学習の場面を意識してデジタルカメラで写真撮影を行い、省察することによって、授業実践力を自ら高めることができる」ことを明らかにすることである。この目的を達するため、以下の二つの下位目標について検討を進める。

①授業分析・改善を効果的に進めるための、撮影テーマの設定方法や、撮影すべき場面、比較検討方法の整理

②無理なく、効果的に分析・改善を進めるための授業検討フォーマットの開発

3.　研究の方法

(1)　共同プロジェクトでの実践・報告

この研究を進めるためには、複数の教員が実際に授業実践に取り組みながら、自ら撮影・省

察を繰り返し、授業検討フォーマットの改善を進めつつ、授業分析・改善のプロセスを具体的に明らかにする必要がある。

そこで、教員・研究者・企業との共同プロジェクト（SPSS プロジェクト）において取り組みを進めることとした。本プロジェクトは ICT 教育の普及推進を目的としており、国内各地から集まった約 20 名の実践教員を擁している。各実践教員から 2008 年度後期には試行フォーマットにて一本ずつ報告があった。

(2)　試行フォーマットの提示

試行フォーマットでは、デジタルカメラによる映像の扱いを容易にし、文章も同一シートに書き出せることから、プレゼンシート(PPT)に貼付・文章入力することとした。テーマについては特に絞り込みをかけなかったが、撮影する場面については「グループ学習場面」「発表場面」「板書」「ワークシート・ノート記入場面」「作業場面」などを具体的な写真と文章の組合せで例示した。シート毎の写真添付枚数については、一枚のものや二枚以上を比較し、文章記述につなげるケースなどを例示した。

以降については、4.結果にて述べる。

４．結果

(1)試行フォーマットでの取り組みから

今回、提出されたものをまとめると以下のように大別することができる。

・グループ学習場面　・実験作業場面
・記入物成果物個人カルテ形式
・学習規律と学習集団の様子
・板書　・板書と学習場面の時系列組合せ
・教材活用場面　・指導前指導後比較

このそれぞれについて、記述量などについてはばらつきがあるものの、簡潔に記述されていた。より授業改善につながると考えられる代表的な記入方法には以下のようなものがあった。

・学習場面の性格でテーマを決め、時系列、及び教師の意図ある指導を行った前後での複数枚写真を用いた場面比較
・なぜその場面を撮影したのか、その意図が明確に記述され、分析されている
・撮影以前からわかっていたことと、映像から読み取れたことが区別し、記述できているもの
・撮影場面毎にラベリングができているもの
・どの写真から、何がわかり、その結果どのように改善しようと考えたかを切り分けて記述

全般的に、記述量がフォーマットにより抑えられた傾向があったため、第一次フォーマットでは、記述面を重視し、記述項目についても 1)メインテーマ、2)写真毎のタイトル、3) 撮影の意図、および撮影時に既に検討したり、わかっていたこと、4)撮影後にこの写真から、もしくは他の素材と組み合わせてわかったこと、と項目を整理・明示し、記入を促すこととした。

５．考察と今後の課題

まだ充分に整理できていないが、写真を見ながら、教師の読み取った内容や意図の「可視化」を行い、併せて考えられる改善策や他の指導方法の検討を重ねることで、授業作りの際の手だての工夫、評価観点の精度の向上などが図られると考えられる。また、この取組から、①授業分析改善のための撮影にかかる視点・要点と②提示用授業検討フォーマットは、内容的に不可分のものであり、相互に実践を通じて改善を進める必要があることも改めて確認できた。

今後は、観点整理、フォーマットの改善を進め、どのように自己分析の質を高める働きかけが可能かなどについてさらに検討を進めたい。

参考文献

1)　加藤隆弘(1999) 総合的学習における「学び」の視覚化による教師の力量に関する研究、教育メディア研究第６巻第１号、日本教育メディア学会、pp.30-42

2)　加藤隆弘(2000) 教師による「学び」場面の視覚化、教育工学関連学協会連合第６回全国大会講演論文集 JCET00-1、pp.463-466